

専業名： 公専校

学校名： 呉市立警固屋中学校

所在地： 呉市警固屋七丁目4番1号

HP： <http://www.city.kure.hiroshima.jp/kegc/index.htm>

生徒数： 5学級、108名

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

個に応じた指導による基礎的な学力の定着
～少人数指導や実態把握を生かした指導の工夫～

②研究のねらい

本校の生徒の生活アンケート(5月実施)の結果から生徒の課題を次のように考える。

結果

ア 家庭学習の時間(塾の時間は含まない)について、2時間以下の生徒は2・3年生が91%、1年生は69%である。また、家庭学習の習慣が身に付いていないと回答した生徒は63%もいる。

イ 宿題や提出物を期日までに提出したと回答した生徒は55%にとどまっている。

考察

ア 生徒は家庭学習が定着できにくく、仕事の関係上保護者の協力も得にくい。

イ 長期休業中における宿題等もやりきる生徒が多くない。

こうした生徒の実態から、国語・数学・英語において学校体制で少人数指導を充実させたり、ドリル学習を徹底したりするとともに、授業における小テストを継続的に実施する中で生徒のつまづきを見つけ、指導に生かしていくことが基礎的な学力を定着させることにつながると考えた。

(2) 研究組織・体制

(省略)

(3) 研究内容

基礎的な学力の定着のため、主に次の2点に取り組んでいる。

①少人数指導による取組み

個に応じた指導をより効果的に行うため、国語・数学・英語における習熟度別少人数指導を中心に、きめ細かな指導を実践する。また、定着度の差が大きい数学においては、TT指導を付加している。

定期テスト後には生徒の希望や定着状況を加味してコースを替えている。さらに、学習環境の整備の一貫として、空き教室を専用教室として授業に活用することにより、個別指導の容易な席の配置や教科資料の展示・掲示による意欲付けを行うことができるとともに、教科担任の移動時間を軽減することで、生徒のつまづきへの対応が可能になると考える。

本年度の少人数指導の体制は、次の表のとおりである。

平成18年度体制	国語	数学	英語
1学年 (2学級、平均21.5名)	—	習熟度別	—
2学年 (1学級、31名)	TT指導	習熟度別+TT指導	習熟度別
3学年 (1学級、32名)	習熟度別	習熟度別+TT指導	習熟度別

②生徒の実態把握を生かした取組み(小テストの活用による)

生徒の実態把握により一人一人のつまづきを早期に発見し、指導に生かすため、毎時間評価規準を明確に設定した小テストを実施している。その結果をドリルタイムや補充学習(個別学習)で活用し、課題を克服する手だてとしている。

※ドリル学習による取組み

全校で毎日帰りの会の前に「ドリルタイム」を位置付け、学習内容や実施方法を工夫するとともに、教科担任と学級担任が連携し、補充学習(個別指導)を行うなど、基礎学力の定着・向上に取り組んでいる。

2 授業改善の視点

(1) 少人数指導における授業づくり

生徒の実態に応じた授業づくり

ア 習熟度別プリントの作成

イ 空き教室を活用した学習環境の整備の徹底

(2) 実態把握とその克服のための実践

①授業開始5分間の小テストによる理解度チェック

②ドリル学習の徹底

ア 全校体制による毎日の10分間のドリルタイムの実施

イ 同じ問題を複数回実施することによる自己評価

ウ 自分の成果を確認することによる意欲の向上

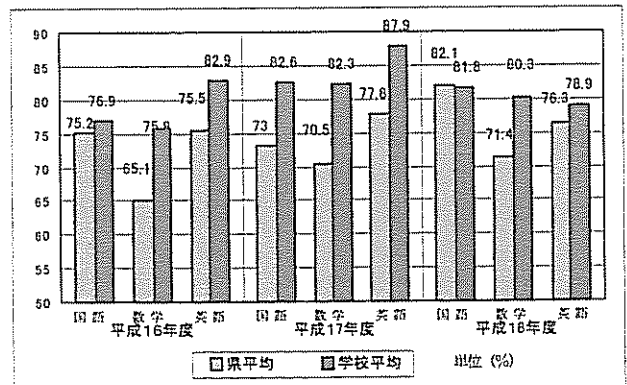
(3) 校内授業研究の焦点化

①研究部を中心とした校内授業研究の教職員への事前アンケートの活用

②研究協議の工夫(KJ法等)

3 研究の成果と課題等

本校では平成15年度から本研究テーマに継続して取り組んでいる。平成16年度から平成18年度の「基礎・基本」定着状況調査における平均通過率の結果は次のようになっている。習熟度別少人数指導を実施している数学科については、生徒が変わっても定着状況が高いことが伺える。



(1) 成果

①少人数指導における授業づくり

ア 毎時間の習熟度別プリントを使用することにより、生徒が自らの進度にあった課題を克服することができ、基礎的な学力の一層の定着につながった。

②実態把握とその克服のための実践

ア 少人数指導と「チェックカード」(授業開始5分間の小テストによる理解度チェック)を活用することで生徒一人一人の定着度や評価規準に対するつまづきを早期に発見、確認し、事後の指導に生かすことができた。

イ 毎日のドリルタイムにおいて、自己評価の記録をとり続けることで「繰り返し学習している」という実感が得られる。それが学ぶことの楽しさや充実感につながっている。

ウ ドリルタイムにおいて、同じ問題を複数回解くことにより、1回目と2回目の所要時間や正答率の向上から、成果を実感できた。

③校内授業研究の焦点化

ア 研究協議の柱を設定し、教職員に対して研究協議の事前アンケートをすることにより、自分の教科との関連を図ったり、主体的な指導に生かしたりするようになった。

イ 授業後の研究協議ではKJ法等により、協議内容を事後の指導に生かせるものにてきた。

(2) 課題

宿題や課題を期限までに提出することができない生徒がまだ数名いる。具体的な行動に結びつかない生徒もあり、継続的な指導やこれまで以上にきめ細かなドリル学習の必要性があると考ええる。

また、教科書のページを示しただけでは予習をやってくる生徒が少ないなどの課題もあり、予習プリントを工夫し、予習をしたことが分かるようにする工夫が必要である。

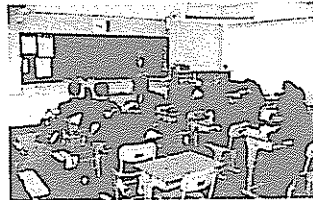
(3) 今後の改善方策等

- ①教職員の授業改善に係る意識改革と体制づくり
- ②生徒の定着状況に対応することができる教師の授業力の向上
- ③学級だより等による保護者への協力要請

4 実践事例

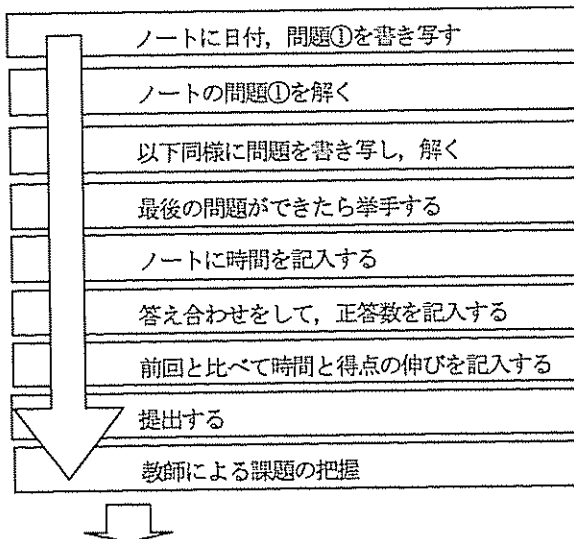
(1) ドリルタイムの工夫

- ①学年・教科等名
1～3学年、数学科
- ②授業改善のポイント
ア 指導方法



生徒の計算技能が身に付くとともに、速く計算ができるようになったことを実感し、学習意欲を高めるためにドリルタイムを実施する。実施方法は3日連続で同じ問題に取り組ませ、その都度、タイムと得点を記録させる。

イ 実施方法（掃除の時間終了後以降の流れ）



帰りの会 (15分)

放課後学習 (30分)

- 個別学習による基礎学力の定着
- 教科担任や学級担任によるドリル学習の指導
- 振り返り学習による自己の課題の明確化

ウ 評価と改善の工夫

○ドリルタイムで課題の見つかった生徒に対して、放課後個別学習を行う。

○教科担任や学級担任によるドリル学習の指導

○振り返り学習による自己の課題の明確化

③授業の様子 (児童生徒の変容)

番号	内容	回数	月日	タイム(前回比)	点数(前回比)
1	まとめる 同類項を	①	10月5日	3'33"	19/20
		②	10月18日	3'20"(-3)	19/20(×)
		③	10月26日	3'13"(-7)	20/20(+1)

ドリルタイムの記録用紙(上表)を見ると、2回目には10秒以上タイムが短縮されることが多い。

アンケートの結果を見ると「前回よりタイムが上がる。」という実感をもっている者が多く(88%)、それが「次も頑張ろう。」という意欲につながっている(76%)ことが伺える。

④成果と課題

ドリルタイムで繰り返し計算練習を行い、タイムや得点の伸びを「ドリルタイム記録用紙」に記録させる活動を通して、生徒が学ぶことの楽しさや充実感をもつことができたと考ええる。また、このことにより、学習意欲が向上するとともに集中力が増し、定着状況も向上した。

(2) 生徒の実態把握を指導に生かす工夫

- ①学年・教科等
1～3学年、数学科
- ②授業改善のポイント
(授業開始10分間、小テスト)

小テスト実施(5分) (机間指導で採点し記録する)

テストの確認及びテスト直し(5分) (提出させ記録する)

(ドリルタイム10分間、補充学習)

ドリル学習の実施(つまずきを確認し、克服する)

(教師小テストの記録)

プリント番号	3章 1次関数	
	①	②
月日	10/5	10/16
基礎への関心・意欲		○
数学的見方や考え方の		
数学的な技能・知識		
学習態度		

評価規準に対して生徒一人一人の到達状況を把握する表

③成果と課題

生徒一人一人のつまずきを確認でき、課題を克服することで学習意欲を喚起できる。

校内体制で他教科においても実施できれば、より一層の基礎的な学力の定着や向上につながるものと考ええる。